

羅什訳『法華経』の語学的研究—“於”について—

椿 正美

0. はじめに

古典漢語で頻繁に使用される前置詞“於”は、動作主の行為と対象との関係を示す重要な語彙であり、我が国の訓読では内容に応じて様々な読み方が適用される。例えば、状況が発生した場所や地点を示す場合には対象を示す名詞に前置され、多く「～において」「～における」と読まれる。また、“於”は比較や受身、更には行為の原因や起点等も示す。そのような場合には、名詞の直後に補語として「～ニ」「～ヲ」「～ヨリ」等の送り仮名が付加され、『孟子』「梁惠王章句」“勞心者治人、勞力者治於人(「心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらるる)”)等に使用例が見られる。

このように、使用条件が幅広い“於”は、鳩摩羅什訳による漢訳仏典『法華経』でも多く用いられ、使用文の例として“於仏所說法、當生大信力(「仏の説く所の法において、當に大信力を生ずべし)”) (方便品)等が挙げられる。但し、訓読のみに基づく解釈では、文中で発揮された機能に対する正確な判断が難しく、それを導くためには“於”自体の語義について古漢語文法の方面から更に詳しく理解する必要がある。

牛島1967は、古典漢語に自立詞、補助詞の他に自立詞との併用によって文の成分を形成する付属語が存在するとし、詞や句の前後に付加されて各種の成分を形成する添詞、二個の自立詞の間に用いられて「並列」「修飾」関係の句を形成する接続詞、そして名詞または名詞句の前に付加されて文の「補足成分」または「補助成分」を形成する前置詞が含まれると述べている。更に、前置詞は述語成分の「限定」を表す種、「限定」「補語」の何れにも用いられる種に分類され、後者に属する前置詞の中で時や場所を意味する語彙の例として“於”“于”が挙げられている¹⁾。

本論では、鳩摩羅什訳『法華経』に見られる“於”の使用例を挙げて古漢語文法の方面から使用条件を分析し、文中で発揮された機能について述べていく。

1. 「行為の場所」の表示や「対象に及ぼす影響」の表現

王力1954は、古代の連結詞の用途は長期的な内容と短期的な内容に分類されると主張し、長期的な内容の用途は秦代以来数千年の時期を経て変わらない種、短期的な内容の用途は漢代以前の一時に一部の書物で用いられたが後に使用頻度が低下した種を指している。この中で“於”の長期的な用途には「所在、方向、起点、終点等の表示」「『～に対する』等の語義の表

示」「受動態の文中に描写される動作主の紹介」「描写された事物の優劣関係の紹介」、短期的な用途には「理由、目的の表示」「手段の表示」が含まれている³⁾。

既に述べたように、『法華経』文中でも“於”は名詞に前置されて発生の位置を示すだけでなく、範囲の起点も示し、更には動作主による行為の影響が対象に及ぶ場合、動作主が対象の存在を掌握して操作する場合等にも用いられる等、幅広く使用されている。

ここでは、以上挙げた「行為の場所」の表示や「対象に及ぼす影響」の表現について述べていく。

1. 1. 各表現の使用回数

まず、対象に当たる地点を示す名詞、行為を発揮する動作主を示す名詞、行為の内容を示す動詞の3要素と前置詞“於”との関係について整理する。文中に動作主の存在が明確にされた場合、これらの3要素との関係は、次のように公式化される。

A (名詞) + “於” + B (名詞) + C (動詞)

動作主 地点等 行為

この公式からは、次の4種類の和訳が成立する。

- ① AはBにおいてCをする ② AはBよりCをする
③ AはBをCする ④ AはBにCをする

上記の4種類の和訳は、本論では①を動作主による行為の「発生の位置」、②を行為が進行する「範囲の起点」、③④を「対象に及ぼす影響」と称して使用する。更に“於”の対象に基づいて①②を〈場所〉、③④を〈事物〉と分類し、次に『法華経』での使用回数を紹介する。

《表1》

対象の種類 機能の内容	〈場所〉		〈事物〉
	発生の位置	範囲の起点	対象に及ぼす影響
序品	18	0	0
方便品	14	0	0
譬喩品	30	4	0
信解品	32	2	0
薬草喩品	5	0	1
授記品	14	0	0
化城喩品	24	5	1
五百弟子受記品	20	0	0
授学無学人記品	10	0	0

法師品	18	0	3
見宝塔品	20	0	0
提婆達多品	8	2	0
勸持品	16	1	0
安樂行品	34	0	0
從地涌出品	23	1	3
如来寿量品	10	0	0
分別功德品	13	1	0
隨喜功德品	9	0	0
法師功德品	19	0	0
常不輕菩薩品	20	0	0
如来神力品	20	0	0
喞累品	4	0	0
葉王菩薩本事品	20	0	0
妙音菩薩品	7	1	0
觀世音菩薩普門品	5	1	0
陀羅尼品	6	0	0
妙莊嚴王本事品	21	0	1
普賢菩薩勸發品	15	0	0
合計	455	18	9

この表によれば、使用頻度は「発生の位置」を示す用法が圧倒的に高く、「範囲の起点」と合わせて〈場所〉を対象とする表現が多くを占めていることが分かる。以下の部分では、場所を示す表現から順次その特徴について述べていく。

1. 2. 場所を示す表現

黎錦熙1992は、介詞を読み手に伝達する内容によって「時間と場所」「因縁」「方法」「領有と統括」の4種類に分類している⁹⁾。この中で「時間と場所」を伝達する種に含まれる「所在を伝達する」種と「方向を伝達する」種に“於”は属し、動作主の行為が発生または移動する場所を表現する語彙として扱われている。既に述べたように、王力1954も“於”の長期的な用途として「所在、方向、起点、終点等の表示」を筆頭に挙げ、場所を示す表現は“於”独特の機能として広く認められている。

ここでは、場所を示す前置詞としての“於”の機能について述べる。

1. 2. 1. 発生の位置

この表現での“於”は、動作主の行為や状況の発生日点を示す名詞に前置され、その地点を特に強調する場合にも用いられる。訓読では、上述のように「～において」「～における」等と読まれる。他の作品では、例えば『韓非子』「存韓」“且夫韓之兵於天下可知也（「且つ夫れ韓の兵の天下に於けるは知るべきなり」）”では、場所を示す名詞“天下”に前置され、文中に〔“韓兵”＋“於”＋“天下”〕が構成されている。

次に『法華経』文中での使用例を挙げる。

(1) 時仏説大乘、經名無量義、於諸大衆中、而為広分別。（序品）

(2) 汝等若於、無量億劫、説不能尽。（藥草喻品）

(1)では場所を示す“諸大衆中”に“於”が前置されて“広分別”が発生する地点が強調され、(2)では“無量億劫”に“於”が前置されて“説”が発生する地点が強調されている。(1)“諸大衆中”(2)“無量億劫”は、共に具体的な場所または地域を示した表現ではないが、ここでは地点として処理されている。

このように、“於”が前置される名詞は、必ずしも具体的な場所や事物を示すとは限らず、多くの例文の該当箇所では、様々な性質を含む語彙が置かれている。そのような例文を次に挙げる。

(3) 舍利弗、於汝意云何。（譬喻品）

(4) 汝於来世、当得作仏。（授学・無学人記品）

(5) 於海教化、其事如此。（提婆達多品）

(3)“於汝意云何”では、〔“於”＋“汝意”〕によって質問内容の範囲が限定され、状態を尋ねる疑問詞“云何”の後続によって疑問詞疑問文が構成されている。“汝意”は抽象的な事物であるが、ここでは場所を示す名詞として処理されている。(4)“汝於来世”では、“於”が時間を示す名詞“来世”に前置されているが、この場合の“来世”も広義による場所を示す名詞として処理されている。

これらに対し、(5)で“於”が前置される“海”は具体的な場所を示し、発生の場所として認められる名詞は条件が極めて広いことが分かる。

1. 2. 2. 範囲の起点

この表現は、行為が発生する起点を示す名詞に前置され、訓読では名詞の直後に送り仮名「～ヨリ」が置かれる。他の作品では、例えば『孫子』「勢篇」“乱生於治、怯生於勇、弱生於彊（「乱は治より生じ、怯は勇より生じ、弱は彊より生ず」）”では、“乱”の発生は“治”、“怯”の発生は“勇”、“弱”の発生は“彊”が根源であることを強調するために“於”が用いられている。

次に『法華経』文中での使用例を挙げる。

(6)汝等於此火宅、宜速出来。(譬喩品)

(7)於昔無量劫、空過無有仏。(化城喩品)

(6)では、“汝等”“宜”によって内容が書き手の要求であることが示され、要求される行為“速出来”の起点が〔“於”＋“此火宅”〕によって明確にされている。(7)では、“無量劫”の状態が“空過無有仏”であると表され、その状態の発生し持続する範囲の起点が〔“於”＋“昔”〕によって明確にされている。このように、『法華経』文中の「範囲の起点」の表現では、前出の「発生の位置」と同様、時間のような抽象的事物が対象となる例も見られる。

1. 3. 対象に及ぼす影響を示す表現

前置詞の定義について、王力1980は接続詞との違いが多少曖昧であると指摘し、両者を合わせて連結詞と称し、例として“於”“之”“以”“而”“則”“與”を挙げている。この中で“則”は接続詞に用いられる語彙、“而”“與”は前置詞または接続詞に用いられる語彙、そして“於”“之”“與”は専ら前置詞に用いられる語彙に含まれる。

接続詞と前置詞は、共に前後の連結を機能とするため、確かに同じ品詞として処理することも可能である。但し、対象との関連性について見れば、前置詞の方が接続詞より密接であり、接続詞“則”よりは“於”の方が対象となる事物に及ぼす影響は強いと判断される。

他の作品では、例えば『戦国策』“割河東大費也、免於国患大利也(「河東を割くは大費なり、国患を免るるは大利なり)」”では、全文の主体に当たる存在者の行為“免”の対象に当たる“国患”に“於”が前置され、〔動詞＋“於”＋名詞〕が構成されている。訓読では名詞の直後に「～ヲ」が置かれる文体である。

ところが、『法華経』では同様の文意を示す構成として、行為の内容を示す動詞が名詞の後部に置かれる〔“於”＋名詞＋動詞〕9例が見られる。ここでは、対象に及ぼす影響を示す前置詞としての“於”の機能について述べる。

次に『法華経』に見られる〔“於”＋名詞＋動詞〕の例文を挙げる。

(8)又於諸法、究尽明了、示諸衆生、一切智慧。(葉草喩品)

(9)於法華経、乃至一句、受持、読誦、解説、書写……(法師品)

(10)我於伽耶城、菩提樹下坐。(從地涌出品)

(8)では、“諸法”を“究尽明了”させて“示諸衆生、一切智慧”を導く経過が表され、“於”は“諸法”に前置されている。(9)では、“受持、読誦、解説、書写”を施す“法華経、乃至一句”に“於”が前置されている。共に“於”は操作の対象に当たる名詞に前置され、操作の内容を表す動詞は名詞の後部に置かれている。

(10)では、(8)(9)のような対象自体が操作される形式ではなく、対象が動作主の行為の目標、目

的の事物に当たる形式となっている。“於”は行為の目標を表す“伽耶城、菩提樹下”に前置され、その後部に動作主の行為を示す“坐”が置かれている。

この形式は、『法華経』全文中でも2例のみであり、何れも「従地涌出品」に含まれている。訓読では、送り仮名「～ニ」が名詞の直後に置かれる。

2. 動詞+“於”+名詞

『法華経』文中では、行為を表す動詞と対象を表す名詞との関係を“於”によって示す〔動詞+“於”+名詞〕も随所に見られる。名詞には、事物自体が当たる場合と行為が発生した地点が当たる場合があり、前者は動作主自身が対象に直接的に影響を与える形式、後者は動作主が対象を操作する形式となる。訓読では、前者には送り仮名「～ニ」が名詞の直後に置かれ、後者には「～ヲ」が置かれる。

動作主、行為、対象の3要素と“於”との関係は次のようになる。

A (名詞) + B (動詞) + “於” + C (名詞)

動作主 行為 対象

①AはCにBする

②AはCをBする

上記の2種類の和訳は、本論では①を動作主による「直接的な影響」の表現、②を「間接的な操作」の表現と命名して使用する。更に“於”の対象に基づいて①②を〈事物〉、〈地点〉と分類し、次に『法華経』での使用回数を紹介する。

《表2》

	事物		地点	
	直接影響	間接操作	直接影響	間接操作
序品	2	2	7	1
方便品	5	5	17	0
譬喩品	1	9	8	3
信解品	0	1	0	1
薬草喩品	1	1	9	2
授記品	0	1	0	0
化城喩品	1	13	9	5
五百弟子受記品	1	1	3	0
授学無学人記品	1	0	5	0
法師品	1	5	1	0
見宝塔品	2	2	10	0

提婆達多品	1	5	2	0
勸持品	0	0	2	0
安樂行品	1	4	5	1
從地涌出品	2	3	7	2
如来寿量品	1	4	8	2
分別功德品	3	2	5	1
隨喜功德品	2	2	1	0
法師功德品	0	4	6	0
常不輕菩薩品	1	2	1	0
如来神力品	0	2	1	0
囑累品	0	0	0	0
藥王菩薩本事品	7	3	2	0
妙音菩薩品	1	2	0	0
觀世音菩薩普門品	1	0	3	0
陀羅尼品	0	1	0	0
妙莊嚴王本事品	0	0	1	0
普賢菩薩勸発品	0	0	0	0
合計	35	74	113	18

このように、使用頻度は地点が対象となった場合の直接的な影響を示す表現が圧倒的に多く、事物が対象となった場合の間接的な操作を示す表現がそれに続いている。以下の部分では、地点を示す表現から特徴について述べていく。

2. 1. 地点を対象とする表現

2. 1. 1. 直接的な影響

『法華經』文中に見られる〔動詞＋“於”＋名詞〕の形式では、名詞が場所または具体的な地名を示し、しかも対象となる地点に動作主自身が直接的な影響を及ぼす表現が最も多い。他の作品では、例えば『韓非子』「有度」“兵四布於天下、威行於冠帶之國（「兵は天下に四布し、威は冠帶の國に行はる」）”に使用例が見られる。ここでは、“兵”“威”が動作主、“四布”“行”が行為、“天下”“冠帶之國”が地点を示し、それらの関係が“於”により表現されている。

次に『法華經』文中での使用例を挙げる。

- (1)又見菩薩、勇猛精進、入於深山、思惟仏道。(序品)
 (2)仏説一解脱義、我等亦得此法、到於涅槃。(方便品)
 (3)我處於山谷、或在木樹下、若坐若經行、常思惟是事。(譬喩品)
 (4)在於他方、遙見守護。(勸持品)
 (5)坐於道場、破諸魔軍。(藥王菩薩本事品)

(1)では行為“入”と対象“深山”、(2)では行為“到”と対象“涅槃”の間に“於”が置かれ、行為の内容と対象との関係が明確に表現されている。“入”“到”は共にやや動的な内容を表現し、“入”は主体の「出入」、「到」は主体の「到達」を示す動詞と解釈される。この他、〔“於”＋対象〕に前置される動的な内容を表現する動詞として、『法華経』では主体の「出現」を示す語彙も見られ、“現”等が例として挙げられる。

これらに対し、(3)では存在を示す動詞“處”が用いられ、動作主“我”が対象“山谷或木樹下”に存在する様子が表現されている。また、(4)でも存在を示す静的な動詞“在”と対象“他方”の間に“於”が置かれ、“遙見守護”を主張するために動作主が“他方”に存在する状況が仮設されている。(3)(4)に見られる“處”“在”は、共に主体の「存在」を示す動詞と解釈される。

このように、『法華経』〔“於”＋対象〕に前置される動詞には、動的な行為を示す語彙と静的な行為を示す語彙が含まれ、主体の移動を表現する様々な形式が構成されている。次に「出入」「到達」「出現」「存在」を示す動詞の中で特に多用された語彙を挙げ、それらを含む形式の使用回数を紹介する

①「出入」	“出”＋“於”	5回、	“入”＋“於”	16回
②「到達」	“到”＋“於”	8回、	“至”＋“於”	7回
③「出現」	“現”＋“於”	4回、	“出現”＋“於”	10回
④「存在」	“在”＋“於”	7回	“處”＋“於”	3回

以上挙げた例文では、何れにも動作主の移動を示す動詞が前置され、『法華経』に見られる〔“於”＋対象(地点)〕では最も多い形式となっている。

この他、動作主の具体的な行為を示す動詞が置かれた形式も見られ“坐”“墮”“遊”等の使用が確認される。この中では(5)に見られる“坐”の使用が最も多く、合計6回の使用が確認される。

2. 1. 2. 間接的な操作

地点を対象とする表現での間接的な操作とは、動作主が移動する際に対象を操作または通過する状態を指す。他の作品では、例えば『墨子』「辞過」“凡回於天地之間、包於四海之内、天壤之情、陰陽之和、莫不有也(「凡そ天地の間を回り、四海の内を包み、天壤の情、陰陽の和、有らざること莫し)」”に使用例が見られる。ここでは、“天地之間”が“回”、“四海之内”が

“包”の対象に当たり、前者の“回於天地之間”が対象を通過する状態の描写となる。

次に『法華経』文中での使用例を挙げる。

(16)如彼諸子、為求羊車、出於火宅。(譬喩品)

(17)過於東方千国土、乃下一点。(化城喩品)

(16)では動詞“出”の対象に“火宅”、(17)では動詞“過”の対象に“東方千国土”が当たり、何れも動作主による通過の表現と判断される。この表現は、上表のように全文中18箇所のみで使用が確認され、地点を対象とする表現では回数が比較的少ない。

2. 2. 事物を対象とする表現

2. 2. 1. 直接的な影響

対象となる事物に動作主自身が直接的な影響を及ぼす表現は、対象が地点となる表現よりは使用回数が少ない。他の作品では、例えば『墨子』「所染」“染於蒼則蒼、染於黄則黄、所入者變、其色亦變(「蒼に染むれば則ち蒼となり、黄に染むれば則ち黄となり、入る所の者變ずれば其の色も亦變ず」)”に使用例が見られる。ここでは、“蒼”“黄”が“染”の対象に当たり、“蒼”“黄”がそれぞれの結果を描写している。

次に『法華経』文中での使用例を挙げる。

(18)我以仏法、囑累於汝。(藥王菩薩本事品)

(19)是菩薩、能以無畏、施於衆生。(觀世音菩薩普門品)

(18)では動詞“囑累”の対象に“汝”、(19)では動詞“施”の対象に“衆生”が当たる。この表現に用いられる動詞には、他に“供養”“食著”等も含まれ、対象の存在する位置の通過を示す“至”“過”等、地点を対象とする表現で用いられた動詞の使用も確認される。

2. 2. 2. 間接的な操作

間接的な操作の表現では、対象が事物となる場合の使用回数が地点となる場合よりも多い。他の作品では、例えば『戦国策』「秦・昭襄王」“齊免於天下之兵、其讎君必深(「齊、天下の兵を免れば、其の君を讎とすること必ず深からん」)”に見られる。ここでは、“齊”が動作主となり、“天下之兵”が“免”の対象に当たる。

次に『法華経』文中での使用例を挙げる。

(20)転於法輪、度脱衆生、開涅槃道。(化城喩品)

(21)不能生於、難遭之想、恭敬之心。(如来寿量品)

(20)では、動詞“転”の対象に“法輪”が当たり、聞き手に強制を示す命令文が構成されている。(21)では、動詞“生”の対象に“難遭之想、恭敬之心”が当たり、文頭の“不能”によって行為の実施が不可能であることが表現されている。

対象となる事物には、(20)(21)に見られるような仏典独特の用語が多く、他に“大乘”“小法”

“經法”“無上道”等の使用も見られる。人物を示す表現では、人称代名詞“汝”や“衆生”、人間を華に譬えた表現“人華”等が対象として用いられている。また、対象が地点となる場合では、“於”直前の動詞は「出入」「到達」等のように内容が限られていたが、事物が対象となる場合は、操作の形式が拡大するため動詞の内容も様々なものが含まれ、それが使用回数の差に影響を与えたと考えられる。

3. おわりに

助動詞“於”の用法は、行為や状況の発生した場所や地点を表示する際にそれを示す名詞に前置するという印象が濃厚であるが、“於”が表示する内容には、比較や受身、行為の原因や起点等も含まれ、実際には“於”は様々な状況の下で使用されている。本論では、鳩摩羅什訳『法華經』に見られる“於”の使用状況を調査し、古漢語文法の方面から使用条件について分析した。

“於”が用いられた形式の使用頻度では、やはり場所や地点を対象とする形式が事物を対象とする形式より高いことが判明した。ここでは、牛島1967の指摘する「限定」の機能が発生地点の限定に効果的に発揮されたと感じられた。また、対象が事物となる場合に“於”が発揮する直接的な影響や間接的な操作、即ち牛島1967が指摘する「補語」の機能についても本論で詳しく述べた。

調査の結果、前置詞“於”には動作主の行為と対象との関係を示す多くの機能が備わり、文中に使用された際には重視されるべき価値が十分に含まれると感じられた。

〈註記〉

- 1) “於”“于”については、漢代以後の学者が『説文解字』“于於也(「于は於なり」)”の部分に基づき同義語であると認めているが、王力1980はこれに対して疑問を示し、“于”の使用を古い形式と指摘している。『法華經』では“既出于世、為諸衆生、分別演説、諸法之実”(薬草喩品)等合計16の使用例が見られるが、“于”と“於”の関係に言及すれば内容が混乱するため、本論では“于”は扱わないこととする。
- 2) “於”の長期的な用途は、原文では“表示所在、所向、所自、所至等”“表示「対於」一類的意義”“在被動式中介紹主事者”“在描写句中紹介差比的關係位”短期的な用途は“表示所為”“表示所以”となっている。
- 3) 黎錦熙1992の分類による介詞の中で、「時間と場所」「因縁」「方法」を伝達する種は、対象の直前に置かれて「前置的介詞」(Preposition)と呼ばれ、前置詞と訳される。「領有と統括」を伝達する種のみは、対象の直後に置かれて「後置的介詞」と呼ばれ、漢語特有の用法であるために特別介詞とも呼ばれる。

〈参考文献〉

牛島徳次1967. 『漢語文法論(古代編)』。大修館書店。

王力1954. 『中国語法理論』。中華書局。

王力1980. 『漢語史稿』。中華書局。

黎錦熙1992. 『新著国語文法』 商務印書館。

【キーワード】 前置詞 原因 位置 影響 操作